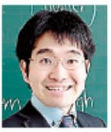
岐阜新聞真学塾

出題　螢雪ゼミナール
長良北校・築樋拓真



国語を様々な側面からみて、日本語の面白さや深さを知ってもらえればと思います。

問題【国語】

次の文について、後の問いに答えましょう。

新聞を読もう。

(1)助詞を抜き出しましょう。　(2)助動詞を抜き出しましょう。

豆知識 雑学コラム

意味を付け加える言葉

今回は付属語についてみていきましょう。日本語の単語は自立語と付属語に分けることができます。自立語とは「新聞」や「読む」のように、その言葉単体で意味を持ち、使うことができる言葉のことです。付属語とは、「新聞を」の「を」や「読もう」の「う」のように、その言葉単体で使うことがなく、自立語とセットになることで使うことができ、自立語に意味を付け加える言葉です。例えば、「新聞を」の「を」は新聞が読む対象であることを表しています。付属語には、さらに助詞と助動詞の区別があります。助詞と助動詞は何が違うのか見ていきましょう。

教科書の説明では、助詞とは、「を」のように付属語で活用しない語のことを表し、助動詞とは、「られる」のように付属語で活用する語と書かれています。確かに、「られる」は下に「ない」が来ると「投げ『られ』ない」、下に「ば」が来ると「投げ『られれ』ば」と活用をしますよね。では、問題文の「う」はどうなのでしょうか。

問題文の「う」は助動詞です。「う」の活用は、未然形、連用形、仮定形、命令形がなく、終止形は「う」、連体形は「これから起こるであろ『う』こと」のように「う」です。つまり、助動詞の「う」の活用は変化しないのですね。変化しないなら、活用してないということだから、助詞なのでは？　と思う人もいるかもしれません。これは、古文に答えがあります。助動詞の「う」は古文の時代には「む」という言葉でした。この「む」は終止形、連体形は「む」ですが、已然形では「め」と活用していました。つまり、もともと他の活用形があったものが、時代を経て使われなくなり、活用しても変化のない言葉になってしまったというわけです。

活用してないように見える助動詞も、歴史をみてみると、きちんとした理由があるのですね。

【解答】

(1)を
(2)う